

シモーヌ・ヴェーユにおける 感受性の基礎的研究の証明と展開

〔I〕

村 上 吉 男

筆者はこれまでの拙論⁽¹⁾において、そこに取り上げたシモーヌ・ヴェーユ（1909年－1943年）の初期の諸作品から *sensibilité*（感受性と訳す）なる単語に着目し、その感受性の意味と用法を浮かび上がらせるとともに、これを彼女独自の思想と位置づけてきた。

さらに前回の拙論⁽²⁾では、初期の諸作品に見出される感受性の意味と用法（感受性の思想）をもって感受性の基礎的研究と称し、この基礎的研究の証明がぜひでも試みられなければならないと指摘しておいた。

そこで、今回の拙論は当然、この指摘に添って書かれる必要があるし、感受性の基礎的研究の証明を可能にさせるテキストはむしろ、彼女が後日（初期の諸作品以降）に記す作品の *sensibilité* を中心にした文章にあって、それを参照するほかないといえよう。しかも、以下に掲載される文章（例文）は、前回述べたような掲載の条件を満たすものでなければならないが⁽³⁾、決して例文自体の文意について詳述されるに値するのではなく、あくまで感受性の意味と用法を証明するためにのみ用いられなくてはならないということになる（かかる理由あるいは紙数の制限もあって、例文（引用文）の全訳は省略せざるを得ないと予め断わっておく）。

証明1 「Lettre à M. BERNARD ou Lettre à un ingénieur directeur d'Usine [III] (M. ベルナルへの手紙またはある技師長への手紙 [III])」 (1936年3月) より⁽⁴⁾。

… Il me semble que n'importe quelle souffrance est moins accablante, risque moins de dégrader,

quand on conçoit le mécanisme des nécessités qui la causent ; et que c'est une consolation de la sentir comprise et dans une certaine mesure partagée par ceux qui ne la subissent pas. De plus, on peut peut-être obtenir des améliorations.

Je suis convaincue aussi que de ce côté seulement on peut trouver un stimulant intellectuel pour les ouvriers. Il faut toucher pour intéresser. A quel sentiment faire appel pour toucher des hommes dont la sensibilité est quotidiennement heurtée et comprimée par l'asservissement social ? Il faut, je crois, passer par le sentiment même qu'ils ont de cet asservissement. (傍線部分は筆者)

この引用文中の名詞 *souffrance*（苦しみ）や *sentiment*（感情）と *sensibilité*（感受性）は、かかる名詞の区別をもって書かれるかぎり、当然それぞれ異なる内容を有するとみる必要がある。ただし、*souffrance* は抽象的な *sentiment* に較べ具象的な意味を示したり、ときには *sentiment* の一種類、ときにはそれより激しく強いものとされる *émotion*（情動）や *passion*（情念）に相当したりすると理解されるだろう。しかし、*sensibilité* がシモーヌ・ヴェーユにあって、*souffrance* や *sentiment* と同じ能力になると捉えられることはない。

それはなぜか。傍線部分を中心にした文章から最後の文章にかけて語られる内容に注意しよう。すなわち、それは、「感受性が社会的奴隷化によって毎日傷つけられ抑圧されている労働者たちに訴えるためには、いかなる感情に助けを求めべきか。思うに、彼らがこの奴隷化について抱く感情にこそ訴えるべきである」とされることにおいて、後者の文章中の「この奴隷化

について抱く感情〉が、前者の文章中の〈社会的奴隷化によって毎日傷つけられ抑圧されている〉感受性（これは属詞としての *heurtée* や *comprimée* を *sensibilité* の付加的修飾語と解釈するものだ）を原因にして生み出されてくるとみることができるからである。たとえば、引用文における先の *souffrance* も、*dégrader*（墮落させること）も、シモーヌ・ヴェーユの場合、〈毎日傷つけられ抑圧されている感受性〉なしには生まれてこないことがここに明確になっている。

とすれば、〈毎日傷つけられ抑圧されている感受性〉は労働者たちあるいは私たちにとって（ここで私たちの感受性が〈毎日傷つけられ抑圧されている〉かどうかは問題にしないでよいと思うが）、ともかく人間に飛び込んでくるもの、受け入れられてあるものになるだろう。人間に飛び込んでくるもの、受け入れられてあるもの、すなわち *sensibilité* とは、心理学・生理学的用語に従うところの刺激ということになるだろう。これに対して、*souffrance* や *sentiment* は反射になるだろう。

そこで、この刺激としての *sensibilité* と反射としての *souffrance* や *sentiment* が無関係でないことをさらにみておこう。筆者は〈感受性が社会的奴隷化によって毎日傷つけられ抑圧されている〉とされるなかで、〈毎日傷つけられ〉るのは、また〈毎日抑圧されている〉のは労働者にとってそれぞれどこかをまず問うてみる。前者では肉体労働によって酷使される身体、後者では工場長の監視や命令などによって重圧を受ける精神がこのどこかに該当するように思われる。そしておのおのの〈毎日傷つけられ抑圧されている〉感受性が身体や精神に重くのしかかってくる（飛び込んでくる、受け入れられてある）ことは、普段のままの身体や精神の状態より〈傷つけられ抑圧されている〉ような動き（運動）がそれらに加わったことを意味させると捉えられるのだ。かかる動きも感受性になるといえる。いやこれこそシモーヌ・ヴェーユのいう感受性にもっともふさわしくあるのだ。しかもこの動きが〈傷つけられ抑圧されている〉と記されるのは、感受性をこうした形容において表現する彼女の知性の動きによるのであり、感受性自体の作用に起因するのではない（感受性自体が傷つけられ抑圧されていることを示すのではない）とみておく必要がある。しかし、今の労働者にとって実際〈傷つけられ抑圧されている〉

あるいは現実の *souffrance* とは、この刺激としての感受性を契機にして生まれ出た感情（または情動または情念）にはかならない。彼女に従えば、感受性なる刺激が精神（脳）に受け入れられそこに局在する想像と混交して受動的感性なる反射をさらにもたらすということであるが、この受動的感性こそここに記される感情（情動、情念）になると断言してよいのである⁽⁵⁾。

前段を踏まえると、さらにまた、身体にとっての刺激である感受性、精神にとっての刺激である感受性、いいかえると身体や精神のそれぞれに対する刺激としての感受性があることを確認し得る。この点からたとえばそのうえ、身体的疲労（身体における刺激としての感受性がもたらすもの）が精神に影響したり、精神的疲労（精神における刺激としての感受性がもたらすもの）が身体に影響を及ぼしたりする場合もあると考えられる。なぜなら、シモーヌ・ヴェーユは *heurtée* と *comprimée* を等位接続詞にて同等に配するがゆえに、〈傷つけられ〉るという感受性（身体における感受性）も精神にとっての刺激となり、〈傷つけられ〉るとする感情（反射）になり得るとみることができるからである。労働者の現状はおそらく、それらの場合の相乗作用によって、〈傷つけられ抑圧されている〉ことや *souffrance* という感情（情動、情念）を感じるそれではなくなるであろう。

証明2 「*Quelques réflexions sur les origines de l'hitlérisme*（ヒットラー主義の起源に関する若干の考察）」（1940年1月）より⁽⁶⁾。

La cruauté la plus horrible apparaît dans cette histoire autant que la perfidie, et, s'y combine. Nul n'a jamais égalé les Romains dans l'habile usage de la cruauté. Quand la cruauté est l'effet d'un caprice, d'une sensibilité malade, d'une colère, d'une haine, elle a souvent des conséquences fatales à qui y cède; la cruauté froide, calculée et qui constitue une méthode, la cruauté qu'aucune instabilité d'humeur, aucune considération de prudence, de respect ou de pitié ne peut tempérer, à laquelle on ne peut espérer échapper ni par le courage, la dignité et l'énergie, ni par la soumission, les supplications et les larmes, une telle cruauté est un instrument incomparable de domination. Car étant aveugle et sourde comme les forces de la nature, et pourtant clairvoyante et prévoyante comme l'intelligence humaine, par cet alliage monstrueux elle

paralyse les esprits sous le sentiment d'une fatalité. (傍線部分は筆者)

ここでも、証明1でみたように、sensibilité と sentiment はそれぞれ異なる内容を有するが、sentiment は sensibilité に関与して生み出されることが明かされている。いやこの点は証明1よりさらに明確になっている。なぜなら、「残忍さが気まぐれ、病的感受性、怒り、憎しみの結果」と記され、最後の行近くでは「残忍さは運命に対するがごとき感情で、人間を麻痺させてしまう」と語られることによって、残忍さが感情に相当し、この感情は病的感受性の結果生み出されると読み取れるからである。以上のことをいいかえると、刺激としての感受性、反射としての感情と捉えることが、それぞれ sensibilité と sentiment なる単語のもつ異なる内容のひとつになるし、sensibilité と sentiment がかわらざるを得ないのは、sensibilité がそれに形容詞 *malade* を付加させてはじめて、sentiment なる *cruauté* (残忍さ) に対応するということだ。

残忍さに結びつかせる感受性が病的感受性というわけだが、しかし〈病的〉と名付けられるのはなぜか。これも証明1の〈毎日傷つけられ抑圧されている〉という修飾語の付いた感受性と同様に考えておけば、〈病的〉なる種類の感受性が本来あるとはいえないだろう。むしろ〈病的〉は、感受性自体が〈毎日傷つけられ抑圧されている〉という例のように、現実の動きを伴わせるところで使われるのではなく、感受性が残忍さの中味を形成するものと関係するところで用いられると捉えることに、その理由が見出せる。その場合、刺激としての感受性が精神に受け入れられるにしても、それほど動きにないものならば、この感受性より混交を可能にする他の想像の方が量的にまさるのであって、混交能力(受動的感性=感情=残忍さ)の大勢を占めるようになるのだ。シモーヌ・ヴェーユが語るローマ人の残酷・背信行為はその増幅も助長もされよう想像でもって現実化されたものである。それゆえ、感受性がかかる想像と混交する(感情になる)わけだから、その残忍さにふさわしいとみる〈病的〉なる形容詞が感受性に付されたと理解するのだ(残忍さには感受性も混じるがゆえに、感受性に〈病的〉が添えられたと解釈しておこう)。いいかえると、感受性が〈病的〉とされるほどのものになっているから、

その刺激と想像が混交して生まれる感情は残忍さを惹起させるのである。

証明3 「Venise sauvée (救われたヴェネチア)」
(1940年9月)より⁽⁷⁾。

Le mal que nous ferons est nécessaire, d'ailleurs il sera court et il y en aura peu. La pitié n'a jamais arrêté personne. C'est une émotion superficielle de la sensibilité qui est souvent la faiblesse des plus généreux, mais ne pénètre jamais au fond de l'âme. Ceux qui disent avoir été arrêtés dans une action par la pitié, ils emploient ce mot pour déguiser leur peur. (傍線部分は筆者)

この引用文もまた、証明1証明2で語った内容をさらに明らかにさせるものと受け取ることができる。次の文章に注意しよう。すなわち「あわれみは誰も決して留めはしない。それは感受性のうわべだけの情動にすぎない……」という箇所は、〈あわれみ〉が *émotion* (情動)(あるいはデカルトに従えば *passion* (情念)⁽⁸⁾)であり、情動は感情の激しく強い能力として、そこ(傍線部分を中心に *superficielle* を省いた箇所)を〈感受性の感情〉に置換が許されると、一方では感受性と感情はそれぞれ異なる内容をもつ単語であることを意味させ、他方では感受性の感情であるかぎり、両者には何らかの関係があることを示唆させるのである。改めて説明するまでもないが、シモーヌ・ヴェーユにあって、感情(情動、情念)は感受性から生み出されるということが、これらの単語の内容の相違とそれらの関係をさしてくるのだ(証明1証明2参照)。(なお、ここで情動が〈うわべだけの情動〉とされることについては、この形容詞は登場人物に語らせるものであって、彼女本人の本心から出てきたものでは決してないと捉えておくべきである)。

証明4 「Descente de Dieu (神の降臨)」(1941年)より⁽⁹⁾。

Comme un enfant apprend l'exercice des sens, la connaissance sensible, la perception des choses qui l'entourent, comme plus tard il acquiert les mécanismes de transfert analogues qui sont liés à la lecture ou à la sensibilité nouvelle qui accompagne le maniement des

outils, de même l'amour de Dieu implique un apprentissage. Un enfant sait d'abord que chaque lettre correspond à un son. Plus tard, en jetant les yeux sur un papier, le son d'un mot lui entre directement dans la pensée par les yeux. De même nous commençons d'abord par savoir abstraitement qu'il faut aimer Dieu en toute chose. Plus tard seulement la présence bien-aimée de Dieu entre à chaque seconde au centre de notre âme à travers tous les incidents grands ou petits qui composent le tissu de chaque journée. Le passage à cet état est une opération analogue à celle par laquelle un enfant apprend à lire, par laquelle un apprenti apprend un métier, mais analogue surtout à celle par laquelle un enfant tout jeune apprend la perception des choses sensibles. (傍線部分は筆者)

この引用文の冒頭の文章、すなわち「子供が、感官の訓練、感覚的知識、自分を取りまく諸物の知覚を学ぶように、またやがて読書、あるいは道具の操作に伴う新たな感受性に結びつけられる類似の伝達のメカニズムを獲得するように、神への愛もひとつの見習いを含んでいる」とされることから検討してみよう。そこで真先に問われるのは、〈新たな感受性〉とは何かということである。これは〈新たな〉と形容される感受性である以上、少なくとも証明1, 2, 3でみた刺激としての感受性と異なっているものでなければならぬ。結語からいうと、〈新たな感受性〉とは、刺激としての感受性が反射される反射としての感受性を意味させるのだ。後者は前者を起因にせずして、〈新たな〉が付される感受性にはなり得ない。後段で感覚についても述べるが、たとえば、この刺激としての感覚がシモーヌ・ヴェーユにあって、〈新たな感受性〉(反射としての感受性)になることは絶対でない。この訳文箇所において、刺激としての感覚や刺激としての感受性のことは不問にされているにしても(主節を除いた訳文箇所が何を語るかを問うのも後段に譲る)、刺激としての感受性こそが〈新たな感受性に結びつけられる…伝達のメカニズム〉に関与しているのでなければならぬのだ。刺激としての感受性が〈伝達のメカニズム〉に伝わるならば、〈新たな感受性〉(反射としての感受性)に結びつけられるケースがあるということであろう。しかもこのケースにおける〈新たな感受性〉は、感受性自体が単独で反射されるものだと理解しておくことができるのである。

ところで、シモーヌ・ヴェーユに従えば、今述べたばかりの刺激としての感受性がそれ自体だけで単独で反射される反射のケースのほか、刺激としての感受性が精神(脳)に局在している能力の想像と混交するという反射のケース、あるいはこの混交に同じく脳に局在する能力の思惟が結合するという反射のケース⁽¹⁰⁾が考えられていたが、後者二つのケースのこともこの訳文箇所において不問にされているのだろうか。

確かに、訳文箇所全体は主節と二つの従属節によって構成された文章であり、そのように訳したのだから、一見して二つの従属節はそれぞれ前者の副詞節が感覚の反射、後者の副詞節が感受性の反射(これは感受性自体の単独の反射である)について語られていると理解し得る。さてここで問題に取り上げるべきは前者のことなのである。かかる訳において、この副詞節の内容が感覚の反射だとみなすことは、〈子供が、感官の訓練〉とされることはともかく、〈感覚的知識〉や〈自分を取りまく諸物の知覚を学ぶ〉とする感覚的知識または知覚と記されることで了解されよう。知識がたとえば理解していること判断することをさすならば、そこに知性(悟性あるいは理性)の作用が加わっているのであり、知覚の内容が彼女のみているもの⁽¹¹⁾であるならば、それは反射を示唆させずにはおかないだろう。

しかしながら、ここにシモーヌ・ヴェーユのさらなる言動を想起させると、すなわち彼女が感覚の働きに対し否定的でしかないことを考えあわせると、彼女にとって少なくとも感覚的知識という反射に信をおくことができなくなるといわざるを得ないのだ。その通りなのである。かかる反射、あるいは感覚による自分を取りまく諸物の知覚(反射)を彼女がここで肯定しているとは到底認めがたいのである。

そこで、もし原文中の〈sensible〉を感覚的ではなく、感受性的と訳すのが許されるならば、la connaissance sensible は感受性的知識という訳になって、それが前記した残る二つの反射のケースに合致すると捉えられてこよう(二つの反射のケースのうち、ここではどちらかといえば、知識という観点から、混交した能力にさらに思惟(知性)が結合するとされる最後に述べた反射のケースになろう)。これによって、訳文箇所の二つの従属節は感受性の反射におけるすべてといてよいケースが網羅されることになるだろう。すなわち、最初の従属節のなかの感官の訓練では、刺激にしる反

射にしる感受性も感覚と同様、sens(感官)を通るがゆえに、子供が、感官の訓練…を学ぶ必要があると理解できるのだし、自分を取りまく諸物の知覚にあっては、諸物の反射のひとつに感受性と想像とが混交する能力⁽¹²⁾、あるいはこの混交した能力に思惟が結合する能力⁽¹³⁾があてはまるといい得るのだ(二つ目の従属節中の感受性の反射に関してはすでにみた通り、感受性自体の単独の反射なのであり、一つ目の従属節中の感受性的知識については既述の通りでここに繰り返さない)。

この従属節を以上のように捉えておかないと、訳文箇所における主節の内容が活きてこないのである。それは〈神への愛もひとつの見習いを含んでいる〉と記されるそのひとつの見習いに当たって、シモーヌ・ヴェーユがまさか子供や私たちに感覚的知識のみを学べ諸物を感覚だけせよとは、また一方の従属節で感覚の反射、他方のそれで感受性の反射をも認めてしまうことは、彼女の言動と矛盾をきたすがゆえにどうしても考えられないからである。(神への愛においても、筆者は感受性自体が単独で反射されることが関与するとみているが、これをもつばら「感受性の基礎的研究」の証明ではなく、展開の課題とみなすので、これ以上の言及はここでは省かざるを得ないといっておく。)

さて、訳文箇所の二つ目の従属節から、すなわち〈読書、あるいは道具の操作に伴う新たな感受性に結びつけられる類似の伝達のメカニズムを獲得するように〉から、筆者はこの新たな感受性(反射としての感受性)を読書の場合には、精神に起因する感受性の反射、道具の操作に伴う場合には、身体に起因する感受性の反射に分けてみることができる。しかしなぜ新たな感受性が〈読書に結びつけられる類似の伝達のメカニズム〉にかかわることになるのか。これは〈類似の〉なる形容詞が〈伝達のメカニズム〉を修飾しているからである。いいかえると、読書に〈道具の操作に伴う新たな感受性〉と同様の感受性(反射)がなければ〈類似の〉とはいえないからである。読書においても何より刺激としての感受性が伝達のメカニズムを伝わり、それが反射されて新たな感受性となる。筆者はこの反射としての感受性を称して、精神に起因する感受性に該当させようといったわけである。

その理由は次の訳文、すなわち「子供はまず、ひとつひとつの文字がひとつの音に対応することを知る。やがて、眼を紙上に投げかけると、ある単語の音が眼

を通過して直接思惟のなかに入ってくる」ということにある。たとえば、ここでいう読書にあっては、ふつう、ある単語が眼(伝達のメカニズム)を通ると表現するであろう(この場合は黙読と思われる)。さらにここではふつう、この単語から私たちに受け入れられてあるものは感覚なのである。しかし〈ある単語の音〉と記されることによって、ここには感覚のことだけではなく、感受性のこともあわせ考えておかなければならないのだ。ふつう思惟の素材は感覚といわれるが、この感受性も〈直接思惟のなかに入〉るならば、それは精神に起因する感受性の反射とみなし得るだろう。少なくとも音とかかわる刺激としての感受性が眼を通るということ、それがここでは思惟と関係して反射されるということへの解釈は、これまでの引用の文意から成り立つだろう。ある単語の音であるかぎり、ある単語は必ずや音読されるにちがいない。黙読と同時にかすその音であるからこそ(文字や綴字をみないことには音は生まれない)、シモーヌ・ヴェーユはこの音から受け入れられる感受性でさえ、耳を通るというより(耳にも聞こえるであろう)眼を通ると記すのではなからうか。それゆえ、ここでひとまず、この感受性(刺激としての感受性が精神に受け入れられることにより精神に起因する感受性)があり、それは外的な感受性といわれるものになるとみておくのである。

他方、〈道具の操作に伴う新たな感受性〉とは、これまでに感受性自体の単独の反射であるといい、また身体に起因する感受性の反射だといってきたところに該当する。しかしそれはなぜなのか。道具の操作において誰しも自己の身体を動かすであろう。子供の道具の操作はたわいもないものだろうが、それでも身体が使われているとすれば、そこに疲れを覚える子供がいても当然である。これは子供の普段の体調と変わったことを示唆させる。要するに変化させることは身体の運動によるのであり、それが身体に起因する刺激としての感受性に相当してくるといっわけだ。この感受性は身体内部(内臓など)に生じてくることをもって内的な感受性になるとひとまずここでもいっておく。これがまた〈新たな感受性に結びつけられる…伝達のメカニズム〉に伝わっていく。すなわち、身体に起因する刺激としての感受性が精神(脳)に伝達され、〈新たな感受性〉としての反射に結びついてゆく。この訳文箇所の内容はそこに留まっているから、結局は〈新たな感受性〉とは感受性自体の単独の反射と理解して

おくしかなないのだ。

むろん、身体に起因する刺激としての感受性が精神に伝わって反射される場合、感受性自体の単独の反射のほか、すでにいったような混交や結合をみての反射もあることはいうまでもない（精神に起因する刺激としての感受性がさらにそこで反射される場合の反射もこれと同様である）。しかしかにはしてそれぞれの反射になるのであろうか。それは感受性、混交時の想像、結合時の思惟の量^①が他に対してまさるかまさらないかにかかわるのであり、それぞれの量^②がまさるときに、それぞれの反射になるといえるのである。身体を酷使用する肉体労働にあって、たとえその刺激としての感受性が精神に伝わり反射されようとも、そこではもはや混交や結合と関係することのない感受性自体の単独の反射になるしかないのだ。想像も思惟も精神から空化してしまうのである。

証明5 『Cahiers I (ノート I)』(1941年より^④)。

plus généralement : éviter au maximum les situations risquant de mettre en contradiction les réactions brutes de la sensibilité avec les sentiments supérieurs et la volonté. (傍線部分は筆者)

「高級な諸感情や意思と感受性の自然のままの反射を矛盾に陥らせる恐れのある状況を最大限避けること」というなかの〈感受性の自然のままの反射〉には二つの内容が含まれているように思われる。そしてこの二つの内容は証明4でみた感受性の意味と用法に対応し、それを明確にさせるものになっている。証明4において〈新たな感受性〉として問うたのはそれが反射なる意味をもつことであった。二つの内容のどちらにもこの反射のことが語られている。なぜなら高級な諸感情（これは情動や情念に該当する諸感情になろう）と意思（考えあるいは思い）と一方にある以上、これらと対等の感受性は反射としての感受性でなければならないからである。それゆえ、一つ目の内容は、その反射としての感受性が自然のままの反射を有するということに関与してくるだろう。反射としての感受性が自然のままの反射であれば、混交したり結合したりして生み出される高級な諸感情と意思に無関係に、いいかえると高級な諸感情と意思と矛盾に陥らせることなく、感受性自体が単独で反射される反射になることをさし

て語られるのではなからうか。

もうひとつの内容は感受性が混交（高級な諸感情になる）したり結合（意思になる）したりする場合、自然のままに反射されることを示唆するものとなる。この際〈感受性の自然のままの反射を矛盾に陥らせる〉ことをなくさせるには、たとえば証明4における〈ある単語の音が眼を通して直接思惟のなかに入ってくる〉の点線部分の直接思惟に感受性が捕えられる（結合される）のではなく、知覚機能の順序を踏まえること、すなわち、まず感受性が想像と混交すること（高級な諸感情が生み出される）、次にこの混交した能力に思惟が結合すること（意思が生み出される）が自然のままの反射なのであり、ここで指示される一般論だということになるのである。

証明6 『Cahiers I (ノート I)』(1941年より^⑤)。

J'ai beau mourir, l'univers continue. Cela ne me console pas si je suis autre que l'univers. Mais si l'univers est à mon âme comme un autre corps, ma mort cesse d'avoir pour moi plus d'importance que celle d'un inconnu. De même mes souffrances.

Que l'univers entier soit pour moi, par rapport à mon corps, ce qu'est le bâton d'un aveugle, pour l'aveugle, par rapport à sa main. Il n'a réellement plus sa sensibilité dans sa main, mais au bout du bâton. (傍線部分は筆者)

二つ目の段落の訳文は次の通りである。「全世界とは私の身体にとって、盲人にとって彼の手の延長である杖のようなものであって欲しいと思う。盲人は実際に自らの感受性をもはや手に感じるのではなく、杖の先きに感じるのだ」(l'univers entier を文意(盲人)との関係で完全なまたは完璧な世界と訳出しない)。ここでもシモーヌ・ヴェーユは杖の先きから感じるものが感覚ではなく、感受性でなければならないことを明言している。その感受性は〈自らの(彼の)〉とある以上、精神に起因するかのようにもみられるが、それ以前に盲人が杖の先きに感じるとあることから、何よりもまず身体に起因する感受性であると捉えられる（この感受性は身体に受け入れられる刺激となり、精神に伝わるかぎりでは反射になるが、その反射させられている感受性を精神側からみることになれば、精神がそれを受け入れている(刺激にする)ともいえるだ

ろう)。そしてこの点を欠いて〈全世界とは私の身体にとって〉という関係が見出されてこないのである。全世界と私の身体は身体における感受性なしにかかわることが不可能なのだ。彼女は身体自体（世界のひとつ）をも身体の外（杖＝世界のひとつ）をも身体に起因する感受性によって精神に取り込め得るところまで語っているように思われる。身体に起因する感受性の生み出されることが、精神だけにではない全世界を感じることであり、全世界と接触し得る条件になるのだ。彼女がこのように全世界のことあるいは精神のことを考える上でも、この身体のごとは必須な事項としてあることがこれで明らかにされるというものである。

証明7 『Cahiers I (ノート I)』(1941年)より⁽¹⁶⁾。

Changer le rapport physique entre soi et le monde (physique, est-ce le mot propre?), comme, par l'apprentissage, l'ouvrier change le rapport physique entre soi et l'outil. (Le marin, entre soi et le bateau.) Blessures : c'est le métier qui rentre dans le corps. Que toute souffrance fasse rentrer l'univers dans le corps.

L'outil fait perdre un mode de sensibilité, le remplace par un autre. On ne sent pas sa fatigue, sa souffrance : On sent la fraise appuyer sur la pièce, comment elle appuie. Tous les métiers reposent sur des transports de sensibilité. Levier—en se baissant, on sent qu'on lève. (傍線部分は筆者)

ここでは二つ目の段落内における「感受性の様式」と「感受性の伝達」という語句をあげるにとどめておく。前者はすでにみたように、感受性の形態がさまざまあることを意味させるものである。それには刺激としての感受性（精神に起因する感受性＝外的な感受性）、身体に起因する感受性＝内的な感受性）、反射としての感受性（感受性自体が単独で反射される反射、感受性が想像と混交して反射される反射、混交した能力に思惟が結合して反射される反射）があった。

後者の des transports de sensibilité を感受性の伝達と訳しておいたのは、証明4の les mécanismes de transfert (伝達のメカニズム) の transfert の訳にならなすぎない。それは transport にしろ transfert にしろ、その trans- には「～の向うに」という意味があるからだ。この伝達には感受性がとり

わけ証明6に記したような身体（内部）から精神（脳）に伝えられるだけではむろんなく、さらに精神から身体に伝えられることも当然あるとみておかなければならない。

なお、最初の段落は証明6の内容とかかわらせることによって、シモーヌ・ヴェーユがいかに身体のごとについて考えているかを明らかにする一例となろうが、感受性の単語を中心に語っている筆者にとって、これ以上のことは今残念ながら省略するほかないといっておかなければならない。

証明8 『Cahiers I (ノート I)』(1941年)より⁽¹⁵⁾。

«Celui qui possède la lumière, comment parle-t-il ? Comment s'assoit-il ? Comment marche-t-il ?»

C'est la vraie question.

[Les objets des sens disparaissent d'abord, puis la sensibilité] (傍線部分は筆者)

「《光のとりこになっている人はいかに話し、腰をかけ、歩くのか》。それが真の問題だ。

〔まず感官の対象が消滅し、次に感受性〕

五行目の鉤括弧はおそらく、シモーヌ・ヴェーユの註釈であろう。そこから感覚だけでなく、感受性も感官を伝わるということが了解される。しかしまた、感官を通るのは一般的にいって感覚とされているのに、ここにはその感覚について問うていないのが認められる。万が一それが問われるとして、感官に飛び込んでくる対象の感覚はそれでも〈消滅〉すると理解されるはずだ。それゆえ、他方の感受性がその問いの前面に出てきて〈次に感受性〉なのだ。

ところでみての通り、次に感受性と訳し得るのみで、あとが続かない。この感受性が主語名詞だとするなら、動詞は何かである。二通りのことが予想できようが、そのどちらも〈lumière (光)〉と関係するという視点で語られなくてはならないだろう。まずこの動詞を前文と同様の disparaître (消滅する) と捉える場合が想定される。では次に感受性が消滅すると光との関係は何か。ここでいう光とは超自然的なことであり、神と置換してかまわない。一方の感受性は人間がこの光に接し得る（とりこになる）際に何より最初の不可欠なきっかけとなる自然的な能力なのである。その点で、対象が刺激としての感受性になって感官に飛び込

んでこなければならぬだけでなく、精神（魂あるいは脳）においてこの感受性が単独で反射されることが必要になる。かかる反射が全き快（歓喜）や苦（不幸）の要因として魂を包み込むやいなや、魂は超自然的なものに移行されるとシモーヌ・ヴェーユはみているように思われる。超自然的な魂になるに及んで、自然的な能力である反射としての感受性はその役割を果たしてしまふ、すなわち〈消滅〉してしまうというわけである。

そして、予想されるもうひとつの動詞は何か。それをたとえば今みたような〈反射される〉と置きなおしても、光との関係では前段と同じ結果をもたらそう。なぜなら、超自然的な光に対し、自然的な能力である感受性は、たとえば光と同じ領域をさすなかでの能力としてあろう〈感受性以上〉⁽¹⁹⁾にならないかぎり、その同じ領域のものとは扱えないし、それとしても語られはしないからである。この感受性をもし感受性以上になるならば、それ自身は当然〈消滅する〉ものになってくるだろう（なおこの段落の内容は本来なら「感受性の基礎的研究の証明と展開」のうち、展開の一部を構成するものであろう。この点は証明4に指摘したことと重なりあり）。それゆえ、隠されている動詞が何であるにせよ、*puis la sensibilité* のあとには *disparaître*（消滅する）の単数三人称の直説法現在の活用形よりまさる動詞がくることはないといえるのだ。

証明9 『Cahiers II (ノートII)』(1941年)より⁽²⁰⁾。

La joie est la plénitude du sentiment du réel.

Mais souffrir en conservant le sentiment du réel est mieux. Souffrir sans sombrer dans le cauchemar. Que la douleur soit, en un sens, purement extérieure ; en un sens, purement intérieure. Qu'elle soit dans la sensibilité seulement ; extérieure, comme étant hors des parties non sensibles de l'âme ; intérieure, comme étant hors de l'univers. (Je suis bien loin de cela.) La douleur, c'est le temps et l'espace s'enfonçant dans la sensibilité. (傍線部分は筆者)

この引用箇所訳は以下の通りである。

「歓喜は現実感の充満である。

しかし現実感を失わずにいるならば、苦しむことはさらによいものである。苦しみのなかに沈むことなく

苦しむこと。苦しみはある意味で完全に外的なもの、ある意味で完全に内的なものでありますように。苦しみのうち外的なものは、魂の感覚的でない部分の外にあるものとして、その内的なものは、世界の外にあるものとして、ただ感受性だけのなかにありますように。（私はそれからとても隔たっている。）苦しみ、それは感受性のなかに入り込む時間と空間である」。

証明8で少し触れておいたような快や苦、とりわけここに記される歓喜と苦しみのタームは、シモーヌ・ヴェーユの現在検証している感受性の解明に当たって、必ずや関与するキー・ワードになるように思われる（筆者はそれらを「感受性の基礎的研究の証明と展開」と題するなかの「展開」において本格的に取り扱うつもりである）。

まず、苦しみが外的なもの（extérieure）であれ内的なもの（intérieure）であれ、〈ただ感受性だけのなかにありますように〉とは、苦しみが感受性にかかわって成り立つことを示唆させる。苦しみはデカルトに従えば、いわゆる「情念」の一種となる⁽²⁰⁾。すなわち、感情がもっとも激しく強くなったものである。シモーヌ・ヴェーユの場合、苦しみが感受性を起因にして生み出されるとみて間違いないだろうが、だからといって、この苦しみは感受性が想像と混交した受動的感性のもっとも激しく強いものとみなしてよいのかどうかである。筆者はこれに否定的である。むしろ、苦しみは刺激としての感受性がそれ自体で単独に反射される結果として名付けられたと捉えておきたい。なぜなら彼女は苦しみが〈ただ感受性だけのなかにありますように〉といっているからだ。しかし果たしてどちらの見方が正当性を得るかは、彼女の語る苦しみをさらに問題にしもっとよく分析しないかぎり、答えを見出せないのではなからうか。それゆえ先きに、感受性の基礎的研究の展開を待たなければならないといってもおいたのだ。

次に、外的なもの（extérieure）や内的なもの（intérieure）と語られることから生じてくる問題である。苦しみには外的なものとの内的なものがあるところから、それを外的な苦しみと内的な苦しみということにしても、前者が〈魂の感覚的でない部分の外にあるものとして〉、後者が〈世界の外にあるものとして〉あるとされるそれぞれの鉤括弧は何を意味するのか。前者の *sensibles* の訳はここでは感覚的が妥当であり、*des parties non sensibles* である以上、

魂には感覚以外のもの、すなわち感受性を受け入れる（あるいは感受性にかかわる）部分が複数あると読むことができる。そこに立って、しかもこの際 des parties non sensibles を括弧でくくって hors 以下をみると〈魂の外に〉となるが、魂の外にとは一般的にいて世界であろうと思われる。後者の hors 以下の〈世界の外に〉とは一般的にいて宇宙もしくはもうひとつの世界、いってよければ超自然的な世界のこと（証明8参照）だろうと考えられる。外的な (extérieure) 苦しみは、この世界と対応させてみれば、身体的な苦しみ、少なくとも身体に起因する苦しみ、内的な (intérieure) 苦しみは、この宇宙あるいはもうひとつの世界（超自然的な世界）と対応させれば、精神的な苦しみ、少なくとも精神に起因する苦しみとして理解されるのではなからうか。

そして、外的な苦しみ、内的な苦しみはともに〈ただ感受性だけのなかにあ〉り、〈感受性のなかに入り込む〉と語られることから、これにならえば、この感受性にも外的な (extérieure) 感受性と内的な (intérieure) 感受性というような感受性があることとなるのだ。これはすでに筆者が主張していた外的な感受性と内的な感受性に相当するものである（この論稿では証明4と証明7参照）。ただし、筆者が名付け得た外的な感受性と内的な感受性においては、それらは同じ刺激としての感受性ではあるが、前者が精神に起因する感受性、後者が身体に起因する感受性としての了解があった。しかし、この引用文から外的な (extérieure) 感受性や内的な (intérieure) 感受性があると容認した上で、それらと筆者の命名していた外的な感受性と内的な感受性を較べると、それらの外的なや内的なは、筆者の用いてきた外的なや内的なとまさしく逆に使われていることに気づかされるのだ。この原因は引用文の extérieur と intérieur をそれぞれ「外の、外観の」から「身体の」、「内部の、心の」から「精神の」という訳語として捉えたところにある。その際、外的な (extérieure) 感受性は刺激としての感受性が何よりもまず身体に生じること、内的な (intérieure) 感受性は刺激としての感受性が何よりもまず精神に生じることによって、extérieur と intérieur が使用されているといえるわけである。ここから、引用文の extérieur と intérieur にならおうとするならば、その外的な (extérieure) 感受性は、筆者が語ってきた内的な感受性、その内的な (intérieure)

感受性は、筆者が語ってきた外的な感受性になるにちがいない。しかしよく考えてみると、引用文における extérieur と intérieur なる形容詞が筆者のいう感受性のそれぞれと入れかわっているにせよ、この形容詞が問題になるだけであって、それぞれの内容（すなわち、引用文の外的な (extérieure) 感受性と筆者のみる内的な感受性は身体に起因する刺激としての感受性、引用文の内的 (intérieure) 感受性と筆者のみる外的な感受性は精神に起因する刺激としての感受性）には間違いのないのである。これによって、外的な感受性と内的な感受性のあることが確かめられたのである（なおこれらの感受性については、これまでの「感受性試論」のなかで、筆者がしばしば主張していたことだ）。

苦しみと表現されるかぎりでは、その原因となる刺激としての外的な感受性も内的な感受性も精神（魂もしくは脳）に伝わり単独にかあるいは混交するかのいずれかに反射されるだろう（証明9の四番目の段落参照）が、この引用文ではかかる反射がどうなんだというところに主眼がおかれ語られているようには思われない。それよりもむしろ外的な感受性が〈魂の外〉のもの、すなわち世界、内的な感受性が〈世界の外〉のもの、すなわちもうひとつの世界（超自然的な世界）とかかわっていることを強調していると読むことができるのだ。

その際、精神に起因する内的な感受性（筆者のいう外的な感受性）はむしろ〈世界の外〉と直接関与し得る能力になると思われるが、同時に〈世界の外に〉関係するのはその能力だけではないとみておく必要がある。これ以外に身体に起因する外的な感受性（筆者のいう内的な感受性）もあって、これがたんに身体のみ反射にとどまらず、精神に伝えられる場合がある（証明6参照）のだから（このとき精神にとってその反射が刺激として受け入れられてくるわけだ）、その外的な感受性が精神においてさらに反射される際、これが内的な感受性の反射（この反射に外的な感受性が組み込まれる場合も予想できる）と同様に、〈世界の外〉と関係するが、その関係の仕方は内的な感受性と〈世界の外〉との関係に較べて間接的であるといえよう。なぜならここでいう〈世界の外〉への接触は精神のみで満たされるのでは決してなく、まずは身体をかかわらせることによって成り立ってくるからである。しかし外的な感受性が身体から精神に伝わるがゆえに、精神は精神だけからなす反射よりも、無限大といえる

反射をかたちづくってくるのではないだろうか。

また内的な感受性もその反射によっては、〈世界の外に〉ばかりか〈魂の外に〉、すなわち世界に関係してくるだろう。内的な感受性は〈魂の感覚的でない部分〉、換言すると魂（精神）の感受的な部分に受け入れられるだけでなく、そこでさらに反射されるに及んで、その反射は当然身体に伝わるにちがいない。これは精神的なものがそれ以外のもの（身体）と結びつかせること、それはまた〈魂の外〉すなわち世界との接触を意味させよう。ここでも内的な感受性において身体もまた世界の一部になるといい（証明6参照）。しかしこの内的な感受性は世界と間接的にかかわるものなのだ。他方その証明6でみたように、直接世界と関係する身体に起因する外的な感受性（筆者のいう内的な感受性）のことも想起すれば、一層、シモーヌ・ヴェーユにおける身体問題の解明を避けて通ることは許されなくなるだろう。

そのひとつとして次なることが導き出されてくる。身体に起因する外的な感受性のもっぱら苦いわゆる不幸、精神に起因する内的な感受性のもっぱら快いわゆる歓喜や美に関係するように思われるが、それらの感受性が直接的にせよ間接的にせよ、身体や精神に関与するという場合、その身体や精神とはいかなることをさして語られるのか。たとえば、内的な感受性における歓喜や美は〈世界の外〉と関連するものであるが、これらの対象は何よりもまずこの世界に求められるはずである。そのとき内的な感受性は視覚や聴覚を通して受け入れられるだろう。するとこの視覚や聴覚は誰しもが身体部分というのであって、精神とみなすことがないのではないか。こうして内的な感受性は精神に起因するということが否定されてくる。しかし筆者はその視覚や聴覚を身体の一部でなく、精神（脳）の一部とみる。なぜか。視覚や聴覚は他の身体（器官）部分よりもっとも脳近くにあって、そのため脳の一部として捉える方が妥当であると思っているからである。それゆえこの視覚や聴覚を除いた部分こそが身体といわれるものになるのだ。

証明10 『Cahiers II (ノート II)』(1941年)より⁽²⁾。

Transfigurer la sensibilité par l'éclairage de l'universel. Le beau y parvient. (傍線部分は筆者)

「普遍を照らすことによって、感受性を変化させること。美は首尾よく感受性を変化させる」。証明9で語っておいたように、美（その対象は何よりもまず世界にあらう）は刺激としての感受性（シモーヌ・ヴェーユのいわんとする内的な感受性）として、視覚に受け入れられるだろう。美が〈普遍を照らす〉ほどであるならば、またそれだからこそ、いいかえると、美がもうひとつの世界（超自然的な世界）を照射させるほどであるならば、またそれだからこそ、感受性が変化すると読むことができるのである。感受性が変化するのは、それが超自然的な世界へと橋わたしをさせるための反射なのである。そしてかかる感受性はそれ自身単独で反射されるものになるだろう。もちろん超自然的な世界は実際魂（精神）にかたちづくられよう。そのためにも感受性は反射されなければならないのである⁽²⁾。

〔続〕

註

- (1) 新潟大学教養部研究紀要「感受性試論」〔I〕-〔VI〕（第17集—第22集）（1986年—1991年）、とくに〔IV〕—〔VI〕参照。
- (2) 新潟大学教養部研究紀要「シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開〔序〕」（第24集）（1993年）。
- (3) Ibid ; P. 50
- (4) 『La Condition ouvrière』 P. 139, Gallimard.
- (5) 感情については「感受性試論」〔IV〕 P. 43 参照。また想像と感情の関係については「感受性試論」〔IV〕 P.38, 註(11) 参照。
- (6) 『Ecrits historiques et politiques』 P. 28, Gallimard.
- (7) 『Poèmes suivis de Venise sauvée』 P. 70, Gallimard.
- (8) Descartes 『Les passions de l'Âme』 P. 112, Librairie philosophique J.VRIN.
- (9) 『Intuitions pré-chrétiennes』 P. 170, Fayard.
- (10) 註(12) と(13) を参照。
- (11) 知覚については「感受性試論」〔VI〕（感覚と感受性—デカルト、カント、ジイドとシモーヌ・ヴェーユ—） P.P. 45—50参照。
- (12) 感受性と想像が混交する能力とは、〈悟性によって導かれ幾何学によって定義される想像〉、〈受動的感性〉、〈欺瞞的想像〉の三つである（「感受性試論」

[IV] P. 35 参照)。

(13) 混交した能力に思惟が結合する能力とは、〈悟性によって導かれ幾何学によって定義される想像の思惟〉、〈受動的感性の思惟〉、〈欺瞞的想像の思惟〉の三つである(「感受性試論」[IV] P. 41 参照)。

(14) 『Cahiers I』 P. 69, Plon.

(15) Ibid ; P.P. 127-128.

(16) Ibid ; P.P. 129-130.

(17) Ibid ; P. 185.

(18) 『Cahiers II』 P. 129, Plon(「C'est le vide dans la sensibilité qui me porte au-delà de la sensibilité.」参照)。

(19) Ibid ; P. 110.

(20) Descartes 『Les passinos de l'Âme』 P.P. 133-135 (Article XCIV), Librairie philosophique J.VRIN.

(21) 『Cahiers II』 P. 180, Plon.

(22) 不幸な人、不幸なこと(もの)をみて感じる場合、その人は本文と同様、精神に起因する感受性を受け入れることになろう。これは、筆者が証明9のなかで記した、自己の身体(内部)そのものが変化することをさしているところの苦(不幸)と異ならせて捉えておく必要がある。むしろ後者の内容にこそ、身体に起因する感受性が関係するといえるのである。